

小山田遺跡第10次調査 (小山田古墳)

現地説明会資料

2019年2月8日
奈良県立橿原考古学研究所



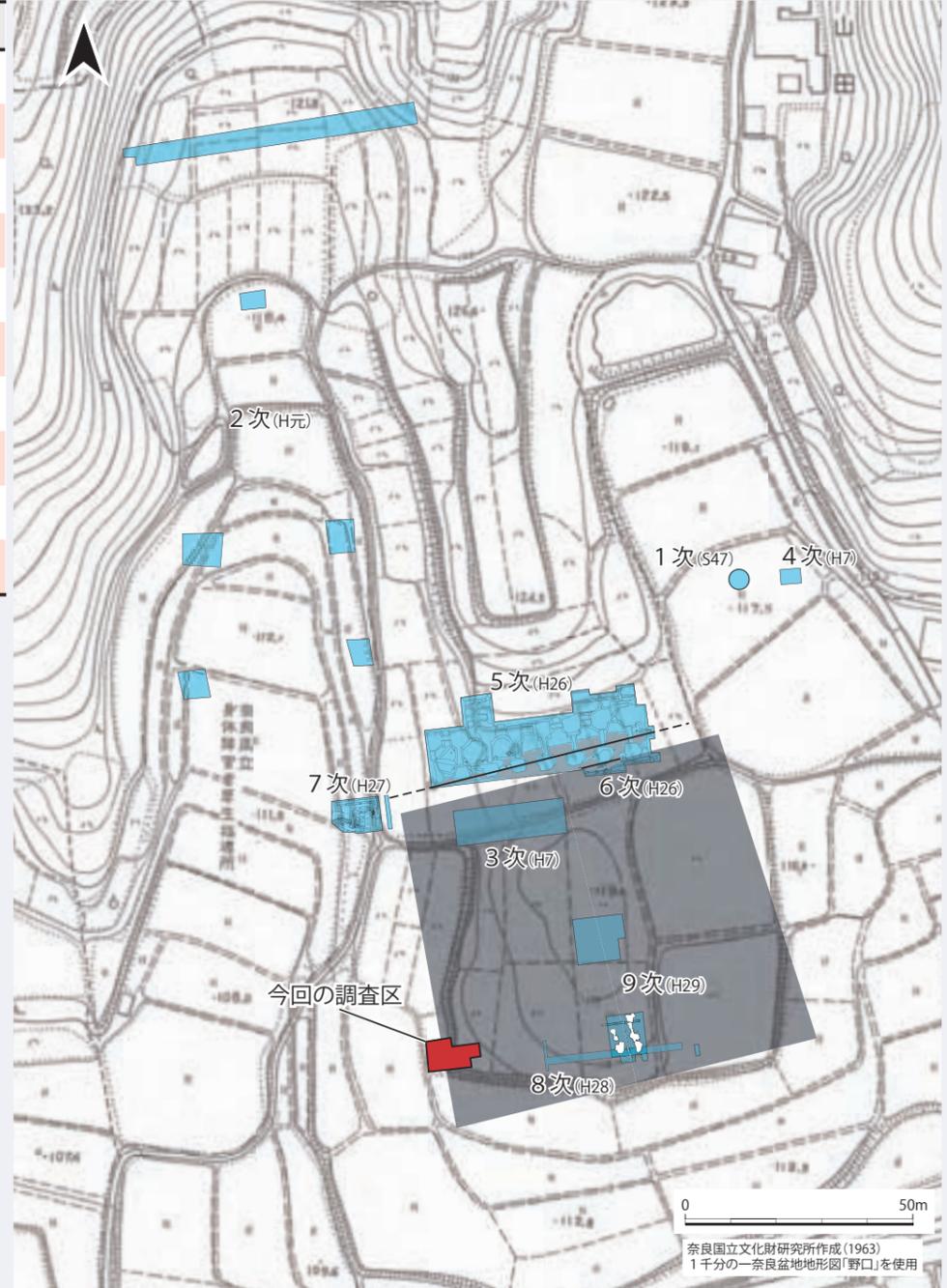


調査地位置図 (S=1/25,000)

国土地理院発行 (2008)
2万5千分の1地形図「畷傍山」を使用

次数	調査原因	調査期間	調査面積	主な遺構	主な遺物
第1次	—	S47.12.7	—	—	土器類・木簡
第2次	県立明日香養護学校 授産所建設	H元.5.8~6.30	500㎡	—	—
第3次	県立明日香養護学校 プール建設	H7.7.25~8.12	200㎡	溝	室生安山岩
第4次	県立明日香養護学校 ポンプ室設置	H8.3.27~29	15㎡	—	室生安山岩
第5次	県立明日香養護学校 教室棟改築	H26.11.10~H27.3.2	740㎡	掘り割り	土器類・鉄製品 ・室生安山岩・結晶片岩
第6次	範囲確認(学術)	H26.12.8~H27.3.2	20㎡	墳丘北辺	土器類・室生安山岩 ・結晶片岩
第7次	範囲確認(学術)	H27.12.24~H28.1.28	83.7㎡	造成土	土器類・室生安山岩 ・結晶片岩
第8次	範囲確認(学術)	H28.12.22~H29.1.27	57.3㎡	墳丘盛土 ・横穴式石室	土器類・瓦類・室生安山岩
第9次	範囲確認(学術)	H29.7.24~8.31	182.9㎡	横穴式石室	土器類・室生安山岩 ・結晶片岩
第10次	範囲確認(学術)	H30.12.23~H31.2.11(予定)	64.3㎡	墳丘盛土 ・土器棺墓	土器類・室生安山岩 ・結晶片岩

小山田遺跡における発掘調査一覧



調査区配置図 (下図は学校建設以前の旧地形)

奈良国立文化財研究所作成(1963)
1千分の1奈良盆地地形図「野口」を使用



① 土器棺墓 (南から)



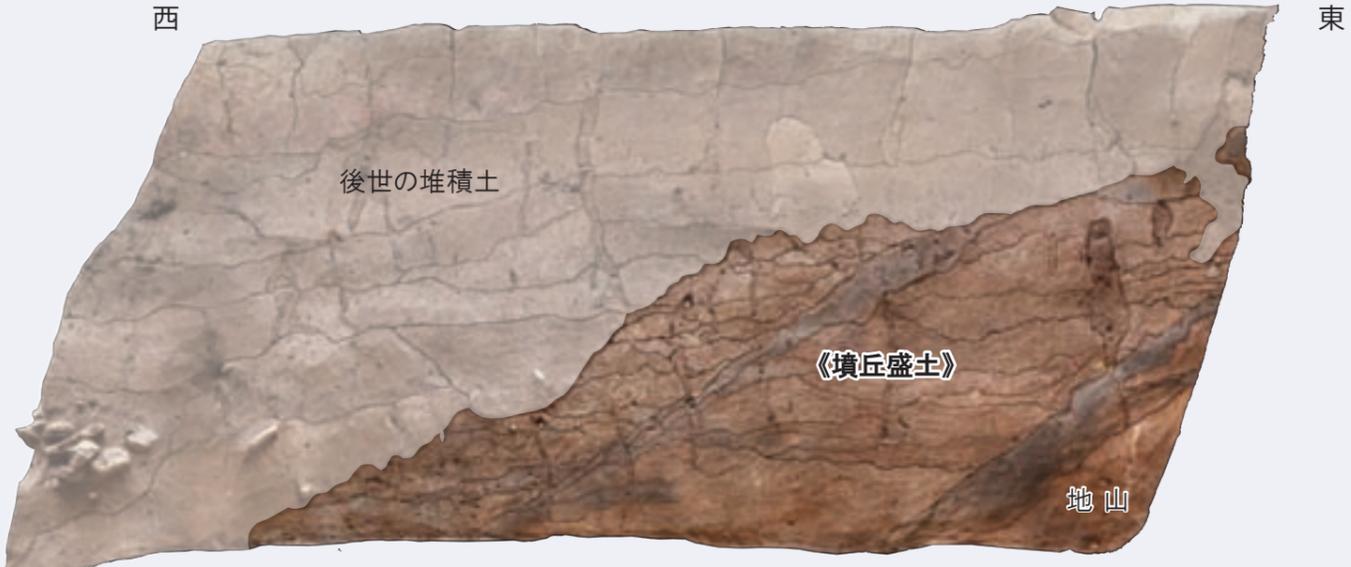
② 石材崩落状況 (南から)



墳丘盛土断面オルソ画像の位置

調査区平面
オルソ画像*

*「オルソ画像」とは、
写真のゆがみを補正して
作成した画像のことです。



墳丘盛土断面オルソ画像

はじめに

小山田遺跡は、高市郡明日香村大字川原に所在します。平成26年度に実施した県立明日香養護学校教室棟改築事業にともなう発掘調査(第5次調査)で、飛鳥時代の大規模な方墳を検出しました。橿原考古学研究所では、この成果を受け、小山田古墳の詳細を明らかにすることを目的に、国庫補助事業による範囲確認調査を継続しておこなってきました(第6~9次調査)。

今年度の第10次調査は、墳丘西辺の構造の確認と墳丘規模を確定するためのデータを得ることを主な目的としておこないました。

発掘調査の成果

調査の結果、小山田古墳の墳丘盛土のほか、土器棺墓を検出しました。墳丘西辺の外表施設は、検出できませんでした。

墳丘盛土 墳丘盛土は、単位が明瞭な水平方向の盛土で構成されていて、幅約1.3mを盛土の作業単位としています。盛土には、砂質土と粘質土を用いていて、1つの盛土の厚さは、平均すると10cm前後です。

墳丘外表施設 墳丘側からの流入土など後世の堆積土に室生安山岩や結晶片岩の破片が大量に含まれているため、墳丘西辺も本来は北辺と同じく室生安山岩と結晶片岩を用いた板石積みであったとみられますが、すべて取り外されて残っていません。墳丘盛土上に直接墳丘側からの流入土が堆積する状況や、流入土からの出土遺物、検出遺構との関係から、古墳が築造された7世紀中葉から少なくとも7世紀後半頃までの間に取り外されたとみられます。

土器棺墓 墳丘盛土直上に堆積した墳丘側からの流入土を掘り込んで埋納されているため、墳丘裾部が埋没しはじめた時期に設けられたものです。掘方の規模は、南北39cm以上、東西約24cmです。土器棺は、口径約20cm、器高約21cmの長胴甕と胴部最大径約16cm、器高11cm以上の口縁部を欠いた

甕を合わせ口にしたものです。埋納された時期は、棺に用いられている土器から、7世紀後半から8世紀初頭頃と考えられます。

まとめ

今回の調査では、小山田古墳の墳丘盛土を検出したことから、墳丘西辺部における墳丘構築方法が判明しました。さらに、墳丘南辺付近における墳丘の東西幅が、一辺約70mの想定位置より西へ広がる状況を確認しました。

墳丘外表施設が取り外されているため、墳丘西辺の明確な位置は不明ですが、検出した墳丘盛土面の傾斜角が、墳丘北辺を構築する際に地山を切土成形した面の傾斜角と概ね一致することから、墳丘西辺の位置を絞り込むことが可能となりました。

その場合、小山田古墳の中軸線から、今回の調査区付近における墳丘盛土裾部までの距離は、約39.7mとなります。外表施設の分を含めて古墳の中軸線で折り返すと、調査区付近における墳丘東西幅は、計算上80mを超えることとなります。

加えて、板石積みの基底の標高は、墳丘北辺では約115mであるのに対して、今回の調査区における墳丘盛土裾部の標高は約113mで、北から南に向かって低くなります。墳丘西辺における南北の高低差と墳丘北辺の板石積みの傾斜角が約25度であることから考えると、古墳の中軸線が北で西に約14度の振れを持つものに対して、墳丘西辺は北で西に約10度の振れを持つこととなります。

今回得られた墳丘西辺の振れを古墳の中軸線で折り返すと、小山田古墳の墳丘裾部は、南にむかってやや広がることとなります。したがって、墳丘南辺の規模は、80mを上回ることが確実にみられます。なお、墳丘北辺の規模は、計算上約72mと復元可能で、これまでの想定を追認することができました。

小山田古墳については、墳丘南辺や東辺の確定や墳丘南側の付帯施設の確認といった課題を明らかにするために、今後も発掘調査を継続しておこなう必要があります。

